

徳次郎石採石場跡と石工の足跡

池田 貞夫（宇都宮市文化財調査員）

1. はじめに

徳次郎石の採石場跡は宇都宮市徳次郎町の西部、男抱山から半蔵山を一直線上に結んだほぼ中間地点に位置する。その区域は小高い山々の尾根が連なり、その尾根に沿って採石場跡が見られる。徳次郎石の採石場跡は、これまで徳次郎町西部3集落が共有する石山である「西根場」と「田中場」が知られていたが、近年筆者が調査したところ、それ以外にも採石場跡があることを確認した。これら採石場跡はすでに閉山となり、遺構のみが往時の繁栄を留めているが、その場所は地域の人々が長年にわたって、石とともに生きてきた生業の場であり、同時に地域の産業を支えてきた貴重な産業遺産でもある。

そこでこの機会に、徳次郎石を採石した場所の状況や歴史を明らかにするとともに、徳次郎石工たちの技術によって築き上げられてきた、優れた石造物、石造建築物を紹介する。

2. 徳次郎石採石場跡の概要

徳次郎石採石場跡は、男抱山（標高338m）から半蔵山（標高502m）を結ぶ小高い山々の尾根に、大小40カ所を超える採石場跡が点在している。これらの採石場跡を分布区域としてまとめると、概ね次の5カ所になる。これらの採石場跡の標高は、概ね250m～400m付近に位置している（図1-1、図1-2）。

- ①共有石山西根場（日光石材採石場を含む）
- ②共有石山田中場（南）
- ③共有石山田中場（北）
- ④秋葉神社山頂及び中腹
- ⑤雁行山山頂付近



図1-1. 徳次郎石採石場跡分布区域図（1～5）

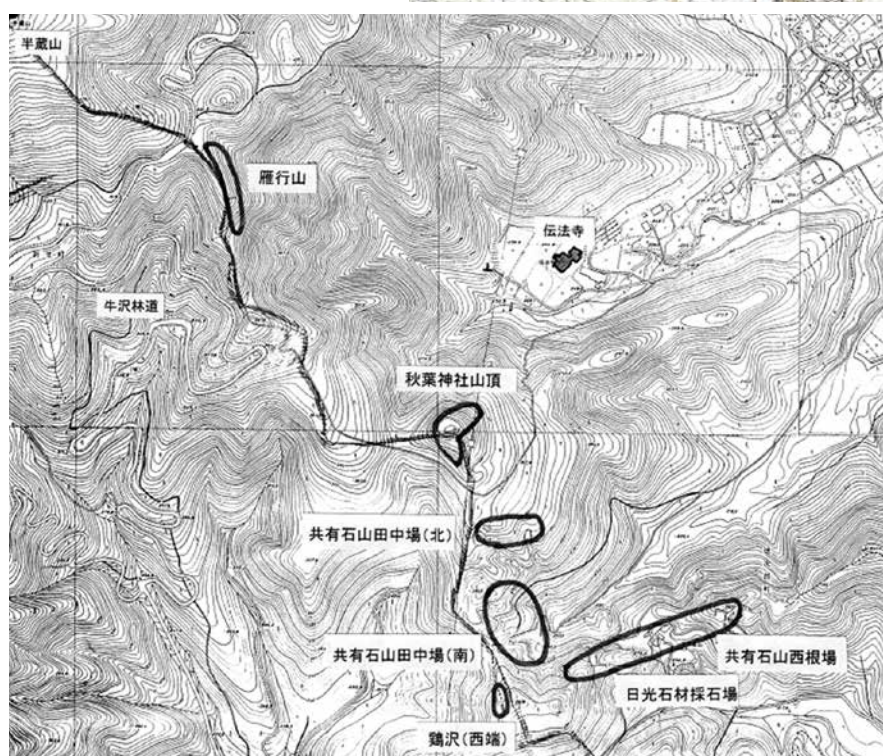


図1-2. 徳次郎石採石場跡分布区域図（詳細）

3. 共有石山西根場

徳次郎町西部3集落(西根・田中・門前)51戸が共有、管理してきた共有石山、徳次郎石の採石場跡は、大きく2ヵ所ある。その1つが「西根場跡」である。この西根場跡は、主に西根集落の人々が手掘りで採石を行い、馬などを利用して石材を運び出した。しかし、戦後の昭和39年～49年の11年間に限っては、「日光石材株式会社」が参入し、機械掘りによって大規模な採石が行われた。

当該採石場跡に行くには、国道293号線の下田中付近(大型太陽光発電所設置場所)から、山道に沿って西方に進む。この道はかつての徳次郎(下町)と新里(田口)を結ぶ古道であり、今もその面影が残る。山道入り口から約600m入ったところの北斜面に沢があり、その山頂に最初の遺構がある。そこから尾根に沿って更に進むと、大小17ヵ所以上の切り立った遺構が次々に現れる。

採石の年代については、西根観音堂の石灯籠(1対)が元禄16年(1703)、同境内の馬頭観音が宝暦2年(1752)、採石場跡近辺にある鶏鳥神社石灯籠が明和7年(1770)など、西根集落には江戸時代の年号を刻む石造物が数多く残っており、江戸時代には盛んに採石が行われていたと考えられる。なお、石材を大量に使用する石蔵の建築は、始まりが江戸時代後期と推定される。その証拠に西根集落で最も古い石蔵は万延元年(1860)作である。

当該採石場跡の一角に、馬の守護神を祀った「生駒神」「勝善神(蒼前神)」の石塔が現存している。当時、採石した石材を馬の背に乗せて運んだり、馬車を利用して運搬するなど、馬は石工にとって重要な動力源であった。このため、馬を神様として祀り、馬の健康と安全を祈るとともに、馬に感謝した。馬の石塔は3基設置されており、その石塔の表面に「生駒神社：明治5年」「勝善神(蒼前神)：明治40年」「生駒神：城埜内」と刻まれている。このことから、当該採石場跡においては、明治期には採石業務が大変盛んになり、特に馬が石材の運搬に重要な役割を果たしたことを物語っている。ちなみに昭和期の戦前、戦後にかけて、当該採石場で採石を行い、石工として活躍したのは、西根の池田竹次郎である。

当該採石場跡はその後、昭和39年～49年に、「日光石材株式会社」が本格的な採石事業に乗り出した。当社の採石場は、共有石山西根場の一角を借用したものであった。この採石場跡に行くには、下田中付近の入り口から林道を西に約700m入り、そこから整備された道路(坂道)を右折して登り、約300m入った地点である。日光石材が採石した場所は、現在「危険箇所」になっており、立ち入りは禁止である。この採石場跡の特徴として、採石の規模が大きかったこと、地下を掘ったこと、機械を使用したこと、運搬する道路を整備したことなどが上げられる。採石の遺構は2ヵ所確認でき、東側が幅約15m×奥行き約6m、深さ約15m、西側が幅約15m×奥行き約10m、深さ約20mである。いずれも山の尾根を切り崩し、垂直に地下深く掘り込んでいる。

「日光石材株式会社」は当初、宇都宮市大谷町の渡辺三男氏等により、その後、採石した石を「日光石」の銘柄で、主に京阪神方面に出荷した。木目が細かく異物が無い、高品質を誇る徳次郎石は、高級石材として市場で高い評価を受けた。しかし10年ほどで資源が枯渇し、採石が打ち切られた。

当該採石場跡の地層は、横に幾重にも重なり、また波を打つ層も多く見られる。このことは、海底火山活動が何度も起こり、そのつど噴出した砕屑物が水中で堆積し、また海流の影響を受けたと考えられている。なお、栃木県立博物館所蔵の大谷層の魚の化石「ソラスズメダイの一種」は、当該採石場跡から発見されたものである



写真1. 共有石山西根場の遺構



写真2. 日光石材採石場の遺構

4. 共有石山中場（南）

当該採石場跡は主に田中及び門前の人々が採石業務を行った場所で、徳次郎石の採石場跡としては手掘り時代の大規模な跡が残る。この採石場跡に行くには、上田中集落の最西端、人家が途絶えた山道入り口から西方に進む。山道を約400m進むと道が左右に分かれるが、左の道を約350m進み、最後に坂を登り山頂の採石場跡に到達する。尾根伝いに大小13ヵ所の遺構があり、最大の遺構は幅約30m×奥行き約18m、深さ約12mもある。次いで大きい遺構は、幅約15m×奥行き約15m、深さ約15mである。これらの遺構を見ると、ツルハシなどの採石道具を使って、岩盤を一旦横に掘り、その後柱を残しながら下方に掘り進んだ様子が窺える。

採石の年代については、田中稲荷神社の石灯籠が正徳4年（1714）、同境内の鳥居が安永3年（1774）、上田中金比羅神社参道入り口の石灯籠が文政8年（1825）などとなっており、田中集落においても江戸時代に建造された石造物が数多く残っている。このことから、同時代には盛んに採石が行われていたと考えられる。

また、田中・門前集落においては、江戸時代「農間渡世」といわれるように、農家が農作業の合間に、石工業に従事していたことが知られている。ちなみに田中・門前集落の戸数は、明治以降ほとんど変化がなく、現在田中21戸、門前21戸であるが、平成8年に宇都宮市立富屋公民館が、「石工に関する調査」を行ったところ、先祖に石工を輩出した家は、田中16戸、門前10戸、西根5戸であった。

一方、この調査において昭和期の戦後、当該採石場跡で採石・加工業務を行った石工として、池田武夫、矢田部常吉、矢田部兼吉、矢田部仙吉、入江徳一郎、入江一巳、入江幸一、入江仁、手塚勇などの名前が上がっている。その大半は田中・門前の石工であるが、一部中町の石工も参入している。



写真3. 共有石山中場（南）の遺構(1)



写真4. 共有石山中場（南）の遺構(2)

5. 共有石山中場（北）

当該採石場跡も田中及び門前の人々が採石業務を行った場所で、田中場（南）よりやや北側の一段高い山頂に位置し、標高は約310mであり、眺望が開けている。通称「高岩」と呼ばれる大きな岩が切り立っており、その近辺に採石場跡がある。この採石場跡に行く入り口は、前述の田中場（南）と同じであるが、山道を約400m進んだ後、左右の分岐点を右に進み、険しい山道を登る。途中田中金比羅神社を過ぎた場所から、北方の斜面を登り切ると、採石場跡に達する。山頂及び尾根伝いに、大小5ヵ所ほどの遺構が残っている。山頂付近には大きな岩場があり、そこには高さ15mほどの採石場も見られる。

採石の年代については、当然のことながら、田中場（南）とともに、江戸時代には採石が行われていたと考えられる。ちなみに山道途中にある田中金比羅神社の石祠には神像が安置され、鳥居には「天保7年（1836）願主田中村城野太助」と刻まれている。

この採石場跡は、特に大正時代に隆盛を誇ったと見られ、山頂の一角に「山の神・石の神」を祀った石祠が建っている。石祠の裏面に「大正十二年旧十月廿五日 石工一同建之」とある。当時、石工らが共同で石祠を建立し、更なる採石事業の繁栄を祈願したと思われる。この時代の石工の名前は確認できないが、昭和期の戦後には、門前の入江仁、小堀富一郎らが採石、加工を行ったようである。



写真5. 共有石山田中場（北）の遺構



写真6. 田中金比羅神社



写真7. 山の神・石の神の石祠

6. 秋葉神社山頂及び中腹

当該採石場跡は門前集落に近く、主に同集落の人々が採石を手掛けたところである。この採石場跡に行くには、門前集落から伝法寺に向かい、山門の手前を左折し、ここからひたすら険しい山道を約450m登り、更に山頂（標高342m）に登る。山頂がある秋葉神社を中心に北側と南側の斜面に、7ヵ所ほどの遺構が見られる。共有石山西根場や同田中場（南）、同田中場（北）に比較すると、個々の遺構の規模は小さく、代表的な遺構の大きさは幅約10m×奥行き約2m、深さ約5mほどである。

門前集落は南北朝時代に開山した伝法寺があり、境内に残る石塔を見ると、念仏塔が延宝3年（1675）、三界万霊塔が元文3年（1738）、葦酒塔が元文4年（1739）の作である。また、集落内にも江戸時代建造の石造物が数多く残っており、古くから徳次郎石の採石が行われていたと考えられる。なお、石蔵の起こりについては、西根集落同様江戸時代後期からであり、門前で最古の石蔵は嘉永2年（1849）となっている。



写真8. 秋葉神社山頂及び中腹の遺構(1)



写真9. 秋葉神社山頂及び中腹の遺構(2)



写真10. 秋葉神社山頂及び中腹の遺構(3)

7. 雁行山山頂付近

雁行山は半蔵山の中腹、伝法寺の西側に位置する険しい山で、標高は約420mである。採石場跡は雁行山の山頂に当たる巨大な岩を中心に、尾根の東側面に遺構が見られる。この採石場跡も、主に門前集落の人々が採石を行った場所である。当該採石場跡に行くには、伝法寺に入る手前の道を左折し、秋葉神社山頂の南側に回り、そこから北西方向に約700mの坂道を登り詰めると、雁行山の山頂に達する。雁行山の山頂に通称「がんこ岩」と呼ばれる、幅約15m×奥行き約6m、高さ約20mの岩がある。この岩からもかつて採石したらしく、周辺には石屑が散在している。山頂から下った急峻な東側斜面に、合わせて15ヵ所の遺構があるが、いずれも小規模である。幅、奥行き、高さが、それぞれ5mほどのものが多く、地表面は土や落ち葉で埋まっている。

当該採石場の採石年代を示す資料として、天保年間（1830-）頃に作成された「日光道中略記七」の中に、徳次郎三宿の産物として、白き石（徳次郎石）が取り上げられており、この石について次のような解説がある。「道より左雁行山伝法寺山よりきり出す 其職人ハ西根田中門前の三村に住すという」。この文書から、江戸時代、すでに雁行山、伝法寺山から徳次郎石の採石が盛んに行われ、地元集落の人々が石工として働いていた様子が窺える。ここでの採石は門前集落の人々により、明治期以降も続いたようであるが、場所が私有地であること、急峻な地形であること、門前の麓まで距離が長いことなどから、大規模な採石は行われなかったようである。なお、門前稻荷神社にある石灯籠は、明治28年に同集落の森田角吉が細工している。



写真11. 雁行山山頂付近の遺構(1)



写真12. 雁行山山頂付近の遺構(2) (がんこ岩)

8. 徳次郎石工の足跡

(1) 徳次郎石工の出現と代表作

徳次郎町近辺には、徳次郎石工たちによって加工、細工された徳次郎石の石造物が数多く残されている。徳次郎石は粒子が細かく、かつ均一で、不純物を含まないことから、美しく温かみがある。しかも軟らかで粘りと耐久性があることから、その性質に着目して石工らが数多くの優れた石造物を仕上げてきた。現在、同町内で確認できる最も古い石造物は下町薬師堂の五智如来石塔で、寛文4年（1664）の作である。その後、延宝、元禄、宝永年間にも石造物が造られ、正徳、享保、元文年間になると次第に数を増す。種類としては念仏塔、供養塔、信仰塔、地蔵菩薩など民間信仰に関わるものを始め、鳥居、石祠、石灯籠など神社関係のものに加え、おびただしい数の墓石が建立されている。

同町近辺には江戸時代初期から石造物が造られており、このことはすでに早い段階で石工が出現していたことになる。石を加工、細工するには、当然のことながら高い技術を要するが、その技術がいつ頃、誰によってもたらされたのか、徳次郎石工のルーツは明らかではない。一説には江戸時代、徳次郎は日光街道の宿場町として繁栄しており、日光東照宮の大造替が行われた寛永13年（1636）以降、全国各地から聖地日光に集まってきた石工の一部が、徳次郎にやってきて技術を伝授（又は定住）したのではないかとする説もあるが、定かではない。いずれにしても江戸時代以降、徳次郎石工の出現によって、徳次郎石を素材とした優れた石造物、石造建築物が造られ、今日まで伝えられてきた。そこで以下、徳次郎町近辺に残る代表作を紹介する。

①智賀都神社旧鳥居

旧鳥居は安永2年(1773)に建立され、巨大な徳次郎石を掘り出して造られた。この鳥居は高さが約6m、柱の直径が約60cmあった。現在、柱と笠木及び鳥木の一部が保存されている。

②智賀都神社狛犬

この狛犬は徳次郎石を細工したもので、拝殿前に阿像と吽像が左右一対ある。大きさは横幅34cm、長さ86cm、高さ76cmで、石台の上に立つ。安政6年(1859)の作で、石工として城野銀右衛門の銘がある。

③西根鶏鳥神社石祠

徳次郎石製の石祠の中でも、極めて精巧に造られており、随所に彫刻が施されている。正面の木鼻と呼ばれる部分には唐獅子と象、欄間には龍の彫刻が見える。当該神社の祭神は猿田彦命で、西根集落4戸で祀っている。石祠の建造年代は、江戸時代後期と見られている。

④下町薬師堂馬頭観音

薬師堂境内にある3体の石仏の一つである。全高が約220cm、像の高さが約100cm。三面六臂の姿をし、頭に馬の顔が陽刻されている。文化元年(1804)の作で、今も細工した当時と変わらない健全な状態を保っている。道標を兼ねており、石台の壁面に「右ハ山道、左ハ氏家、白沢道」と刻まれている。

⑤下町薬師堂六地藏

同じく下町薬師堂境内にあり、六体の地藏像が陽刻されている。宝珠造りで、高さは203cm。享保16年(1731)の作ながら今なお美観を保っており、徳次郎石の品質、徳次郎石工の技量の高さを示している。

⑥下金井宝篋印塔

下金井町の真言宗蓮蔵院境内にあった石塔である。基壇から基礎、塔身、笠、相輪と積み上がり、笠の四隅には隅飾り突起がある。塔の高さは255cm。宝暦14年(1764)の作で、堂々たる風格がある。



写真13. 智賀都神社旧鳥居



写真14. 智賀都神社狛犬



写真15. 西根鶏鳥神社石祠



写真16. 下町薬師堂馬頭観音



写真17. 下町薬師堂六地藏



写真18. 下金井宝篋印塔

⑦ 下横倉十九夜供養塔

下横倉町多藤神社の鳥居をくぐった山道右手にある。十九夜供養塔は江戸時代以降、各地に見られるが、この塔は昭和3年（1928）のもの。着色された如意輪観音像で、寄進者（細工人）は、徳次郎町中町の入江兼吉である。兼吉は石蔵の彫刻にも手腕を発揮したほか、猪倉山泉福寺の弘法大師像も制作している。

⑧ 西根地蔵菩薩

徳次郎町西根の観音堂境内北側の建物に納められている地蔵菩薩である。石像の形式は丸彫りの座像で、徳次郎石の石肌が美しい。高さは約165cm。天明2年（1782）の作である。

⑨ 西根池田家石蔵

徳次郎石をふんだんに使用した当地域を代表する石蔵である。石蔵の形式としては張り石と呼ばれる構法で造られたもの。屋根に石瓦を載せ、外壁に板状に加工した石を張り付け、和釘で止め、漆喰を施している。側面の窓には松竹梅や鶴亀の彫刻を施している。明治9年（1876）の建造である。

⑩ 下町薬師堂山門

日光街道沿いの下町薬師堂入り口に建つ山門である。2本の柱に切妻屋根を載せた形式で「棟門」と呼ばれる。左右の柱、屋根の石瓦はすべて徳次郎石でできている。宝暦元年（1751）の作である。

⑪ 上町岡本家薬医門

岡本家は徳次郎町上町の旧家で、中世の古道沿いに家がある。家の周囲を堀で囲まれている。家の入り口に薬医門があり、屋根はすべて徳次郎石の石瓦である。弘化4年（1847）の作という。

⑫ 田中入江家冠木門

入江家の先祖はかつて石工を生業としており、入江利左衛門は今里町羽黒山神社の狛犬や喜連川神社の鳥居の建立に関わっている。徳次郎石製のこの冠木門は、明治33年（1900）に利左衛門が手掛けたもの。



写真19. 上横倉十九夜観音



写真20. 西根地蔵菩薩



写真21. 西根池田家石蔵



写真22. 下町薬師堂山門



写真23. 上町岡本家薬医門



写真24. 田中入江家冠木門

(2) 徳次郎石工と石蔵の彫刻

徳次郎石を用いた美しい石蔵は、江戸時代後期から構築されるようになった。従来農家が所有する倉庫は、木骨造りの板倉が主流であったが、この板倉の屋根に石瓦を載せて石瓦葺きとし、その後、板状に加工した石を外壁に張り付け、建物全体を石で覆う構法が生まれたのである。その結果、収穫した穀物や貴重な家具類を、火災や災害から守れるようになり、石蔵は農家の間に急速に普及した。その後石蔵の構法が、張り石から積み石に変化した。徳次郎石を使った石蔵の建築ブームは、明治期から大正期まで続いた。

石蔵は火災から穀物や家具類を守るための建築物として発展したが、同時に徳次郎石の持つ美しさと温かみ、重厚さは、農村の美しい景観や町並を生み出すこととなった。特に注目したいのが、石蔵に彩りを添える精巧な窓である。石蔵の窓を見るとは、当初は主に通風性を考慮しただけの素朴な窓が多かったが、その後細工を得意とする石工らによって、木造建築を真似た和風窓、窓枠の側面にオーダー柱を取り付けた洋風窓が設置され、窓は実用性と美術性を兼ね備えるものに発展した。特に和風窓については、窓の上部に庇を設け、戸は引き戸をとし、さらに戸そのものや外枠に、鶴亀や松竹梅、高砂、中には龍虎の画題を取り入れた彫刻が施された。これらの彫刻は、徳次郎石工たちの技術水準の高さを示すものであり、正に美術工芸品といってもよい。徳次郎町近辺の石蔵には、当該石工が築き上げた精巧な彫刻が相当見られるので、秀作の一部を紹介する。



写真25. 鶴亀（寛政3年）徳次郎町田中



写真26. 鶴亀・松竹梅（明治9年）徳次郎町西根



写真27. 鶴亀・高砂（明治12年）徳次郎町下町



写真28. 鶴亀・高砂・松竹梅（明治42年）西根



写真29. 月・竹林・小鳥（明治期）田中



写真30. 菊・筍掘り（明治期）大網町



写真31. 鶴亀・恵比寿大黒 (大正14年)
徳次郎町中町 石工 (入江兼吉)



写真32. 鶴亀・松竹梅 (昭和5年) 大網町
石工 (手塚勇)



写真33. 高砂・龍虎 (昭和9年) 中町
石工 (入江徳一郎)



写真34. 恵比寿大黒・波に千鳥 (昭和22年)
西根 石工 (池田竹次郎、池田長重)

9. むすびに

本稿では近年の調査結果に基づき、徳次郎石の採石場跡の遺構をたどるとともに、徳次郎石工たちが残した代表的な石造物や建築物を紹介した。採石場跡は地域の産業を支えた産業遺産であり、石造物や建築物は地域の人々が築き上げた、いわば民俗文化財であり、美術工芸品でもある。これら先人が残した産業遺産、民俗文化財を保存し、次の世代に伝えることが、今日に生きる我々の責務である。幸い、地元富屋小学校においては、長年にわたり地域の歴史や文化財をテーマとした「富屋再発見学習」が進められており、児童たちの徳次郎石に対する理解度は高い。一方、富屋地区まちづくり連絡協議会においては、「富屋の自然・歴史・文化財ガイド養成講座」の開講や、「富屋再発見歩け歩け大会」などの見学会を通じて、徳次郎石のもつ素晴らしさが再認識されている。

令和元年5月に「徳次郎石研究会」が組織され、徳次郎石をテーマとした研究活動が始まったが、調査・研究はまだ緒に就いたばかりである。今後、多くの専門家の支援を受けながら、地質、歴史、民俗、産業、景観、建築、美術など、多様な側面から徳次郎石を調査・研究し、徳次郎石が有する豊かな文化資源を、地域活性化に活かすことが重要である。

主要参考文献

- 「日光道中略記」 天保年間 国立公文書館蔵
宇都宮市立富屋公民館 (中川博夫編集)「明日に伝えたい富屋の郷土誌」 1997
宇都宮市役所職員 自主研究グループ (中川博夫編集)「徳次郎石の研究」 1997
池田貞夫「富屋の石造文化財」 2007
池田貞夫「徳次郎石の採石と利用の歴史」(徳次郎石研究会活動成果報告書2019年度所収) 2020